慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ダンの政治思想 : 非理性の狡知と非西洋への眼差し
Sub Title	
Author	堤林, 剣(Tsutsumibayashi, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の政治学 政治思想 : 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.183- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88454709-00000009-0183

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・ダンの政治思想

――非理性の狡知と非西洋への眼差し――

堤林剣

はじめに
一　政治における非理性の狡知
二　ダンと日本の関係

はじめに

日本におけるジョン・ダン（一九四〇―）の名声は、その画期的なジョン・ロック研究に負うところが大きい。また、ポーコックやスキナーと共にケンブリッジ学派の代表的思想史家として活躍してきたことも、日本の政治思想学界では周知の事実となっている。だが現代政治を扱った浩瀚な著作に関しては（特に近年のデモクラシー論については）、広く知られているとは到底言いがたい。これはある意味では奇妙なこととも思える。というのも、西洋ではもちろん、韓国や台湾といったアジア諸国でもダンの現代政治研究は衆目の集まるところだからである。その関心は韓国では純学問的な領域を超え、ついにはダンを金大中元大統領の顧問として招聘するまでに至った。また台湾では、彼が長年所属していたケンブリッジ大学を定年退職する際、中央研究院の主催によって退職記念カンファレンス（International Conference in Honor of Professor John Dunn）までもが開催されたのであった[1]。

諸外国でかくも注目されながら、日本国内では必ずしも照明の当てられていないダンの現代政治研究について、その内容の一端を紹介するのが本稿の目的である。ケンブリッジ大学で院生だったころダンに師事していたということもあり、私も台湾で開催された退職記念カンファレンスに招待されたのだが、本稿はその時に発表したペーパーを邦訳しそれに若干の修正と加筆を加えたものである。

一　政治における非理性の狡知

政治を現在の状況および過去の文脈に照らして理解すること、そしてまた、よりよい未来を創り出すために（あるいは、少なくとも地球全体を巻き込むような決定的な破局を避けるために）実効性のある政策を提言すること、こ

れら二つの課題はどちらもそれぞれ困難をきわめるものであって、ジョン・ダンが不断に指摘するとおり、いずれも未だかつて満足に達成されたためしがない。[2]

それでも相対的にいえば、前者のほうが後者よりもいくらか容易ではある。現在と過去のほうが、不透明な未来よりもはるかに捉えやすいのは当然だろう。しかしかといって、片手業ですむはずもない。既存の政治理論に現状を説明する力があるのかどうか。『政治思想の未来』から『非理性の狡知』[3]に至る諸著作のなかで、ダンはそれを繰り返し疑問視してきた。[4]特に、ここ数十年間というもの英米の学界において多大な影響力をふるってきた政治理論を考察する際には、彼の批判の矛先がひときわ鋭さを増す。「この一連の思想体系が学界に及ぼした影響の大きさは、それが現実の政治、特に当地〔北米〕における政治的闘争には情けないほど小さなインパクトしか与えなかったことに引き比べると、奇妙なくらい不釣合いだ。（中略）この甚大なる知的影響力と矮小極まりない政治的効果とのアンバランスを解釈しようとする試みが、これまでかくもわずかしか行われてこなかったというのは、依然として驚くべきことである」。[5]

しかし、これは現代政治理論が実践では無能であることを徹底的に描写するために誇張された、単なる言葉の綾にすぎないのではないだろうか。何のかのいおうと、これらの理論が現実の政治的アジェンダと結びついていた例は（特に北米において）無数にあげられるのである。だがこうした反論の仕方をしているかぎり、ダンの議論の要点をつかむことはできない。というのも、彼の意図は現代政治理論が提供すべき視座を片端から中傷することにあるのではなく（後の議論で明らかになるとおり、この可能性はきわめて低い）、むしろ、こうした理論のほとんどが（分配的正義など、内在的にはきわめて重要とはいえ）特定の問題にばかりとらわれ、何が政治にとって根本的に重要であるかに十分な注意を払っていない点を明らかにすることだからである。彼自身の言葉をかりれば、近代リベラリズムの政治（理論）は「本来の意味における政治を敬遠し、いかにして道徳的目標が政治的領

域において有益に実現されうるかを判断するという試みを放棄し、代わりに、それが首尾よく実現された場合この道徳的目標は何に存するかという、もっと気楽な問題に乗り換えたのである」[6]。

あるいは右の論点は、「政治的なるもの」の等閑視として簡潔に言い表せるかもしれない。ダンが批判の対象としている理論は、比較的安定したリベラル・デモクラシーの存在を当然視しているようである[7]。しかしこれはおそらく問題だろう。なぜなら、こうした前提がほとんど認められないような国あるいは地域では、理論の有効性が著しく減じられることは否めないからである。ガーナでの経験を通じてダンは、政治の本来的な不安定性と破壊力とを決して忘れてはならないと確信するに至った[8]。

そしてまた、政治的なるものの意義と作用は、外見上は安定し経済的にも豊かなリベラル・デモクラシーの国だからといって無視できるようなものではない。このような恵まれた国々においてさえ、現在の幸運な条件がいつまでも続くなどと暢気に考えることはゆるされない。政治的なるものに背を向け続けるならばこれらの条件はいつ崩れ去るともかぎらないのだ――ダンはそう言っているかのようである。それゆえに、現代の社会契約論をその古典的先人と比較するとき、彼の態度は否定的なものとならざるをえない。時代錯誤は免れえないとはいえ、政治的義務の問題を中心的に取り扱っているという点において、後者の思想のほうがはるかに力強く響くからである[9]。

分配的正義を論じるより先に、いかにして正当とみなされうるリベラルな政治社会を（その複雑さと矛盾のすべてを含みながらも）設立し維持していくかを理解すること、あるいは少なくとも理解しようと努めることこそが、喫緊の課題なのだ。この政治社会なくしては分配的正義の議論はおろか、あらゆるリベラルな政策が現実性を失う。そしてまさにこうした根源的な探求の姿勢が、ダンを「誰が裁定者となるべきか」という問いへと繰り返し導くのである。（この問題はカール・シュミットもまた、独自の「政治的なるもの」の理解を形成していくなかで精力的

に追求したものであるが、両者の類似性は単なる外見上のものである。ダン自身が説明しているとおり、「誰が裁定者となるべきか」――現代のリベラルな理論では棚上げされることが多く、そのためにシュミットの批判に対して弱点をさらすこととなる――はジョン・ロックの政治思想にとっても同様に中核を占める問いである。[10] そして、シュミットのいう「例外状況」とダンが対峙し、可能な限りその発生を阻止しようとするなかで、ダンは「信頼」および「慎慮」の概念の重要性を強調するわけだが、それはある意味でロックに近い立場であるといえよう。[11] シュミットにとって政治の問題はむしろ「無からの創造」（*creatio ex nihilo*）として主権者による決定の問題であり、友敵関係の区別を基礎としている。言うまでもなく、信頼も慎慮も脆くはあるが人間にとって本源的な特質であり、長い歴史的伝統と人類の経験によって醸成されてきたものである。[12]）

さて、今日における不断のグローバリゼーションとそれに付随する危機、地球規模で引き起こされる人災と環境破壊に鑑みれば、わずかばかりの恵まれたリベラルな民主主義国家をのぞいて世界全体を支配している政治、経済および環境上の諸条件を単純に無視することなどとてもできない。こうした危機を克服する、あるいは最低でも来るべき最悪の事態を回避するためには、想像力を駆使し今までとは違う新しい仕方で思考することが求められるのだ。それがいかに重大な課題であるかをダンが考察するのは、我々が共有する運命を、そしてその運命に一刻も早く向き合う必要性を彼が感じているからにほかならない。

とはいえ、ダンがこの課題を達成する具体的な方法をなんら提示していないとしても、驚くにはあたらないだろう。彼が砕心しているのはむしろ、未来がどうあっても予測不能であり人間のコントロールを逃れゆくものであること、それは避けがたい宿命であると説くことのほうである。彼は言う、「生起する現象を支配する、あるいは何とかしてその全体像を理解し、我々自身に都合のよいよう明確かつ精密なかたちで捉える――そんなことを当然のように期待できる人間など、我々のうちには一人もいない。またもしその理由を、単に演算能力の限界

が足枷となっているだけだと考えるなら、大きな間違いを犯すことになる」[13]。そしてこれは「現代政治における一つの教訓」なのだと。実に「非理性の狡知」という表現は、政治に備わるこの統御不能な性格を指すための造語なのである。

このような立場をとればオプティミズムの入り込む余地などほとんど残されていないのだが、かといって宿命論や運命の女神への全面降伏を推奨するわけでもない。ダンの見解では、我々が自らの運命を支配できないという事実も、怠惰や絶望の言い訳にはならないのである。『非理性の狡知』序文にはこう書かれている。「本書は、失望の不可避性について書かれたものということもできよう。だが私自身はむしろ、どのようにして希望を抱くか（また、どのような希望を抱くべきでないか）を記した本と考えたいのだ」[14]。

そうとすれば、我々はどのように歩むべきなのだろうか。ダンのアプローチは次の一節に簡潔に表わされているように思う。

> 政治理論の目的は現実の苦境の原因を究明し、それに立ち向かう最良の手段を示すことである。これを達成するためには、ある程度区別しうる次の三つの能力を養わなければならない。第一に、我々の生活における社会的・政治的・経済的状況がどのようなものであるかを見極め、さらに、なぜそうなっているのかを理解すること。第二に、いかにして我々が正当かつ一貫した仕方でこの世界の在り方とその未来を願うことができるかを考え続けること。そして第三に、今あるこの世界を理に適った仕方で我々の望む方向へと導いていくことを、どこまで、どういった行動を通じて、そしてどんなリスクを負って現実的に期待しうるかを判断すること。この三つである[15]。

第一の能力については、プラトン・アリストテレスからロールズおよびドゥオーキンまで連綿と続く西洋政治

思想の知的伝統に今なお学びうるところがある、とダンは考えている。古典研究がいかに「学問的に妥当」であり「教育のうえで不可欠」であるかを語る際、彼はその理由を、古典のうちに「我々が生きるこの世界の政治を思慮分別のある仕方で理解するための認識手段が今日なお豊かに見出され、しかもこの手段を完全に代替できるようなものは、地球上の他の地域に伝わる個別的な文化遺産のうちには存在しない」からだと述べている。[16]

しかし未来に関する第二、第三の能力に問題が移ると、様相は一変する。なぜなら、切迫する地球規模の危機に対峙するには（そしてその成功には人類の存亡がかかっているのだが）、西洋の思考・行動様式を拡張するだけでは単純に不十分だからである。さらになぜ不十分かといえば、「非理性の狡知」は既存の西洋的政治パラダイムへ訴えるだけでは理解も制御も不可能だからである。そしてそのうえ、人類の未来への歩みを破滅から遠ざけようとする有意味な試みはすべて、世界中のあらゆる地域に暮らすさまざまな人間の相互協力に根ざしたものでなくてはならない。それはすなわち、多様な文化的・文明的背景を担う人々が「人間の政治的思考の歴史〔的展開〕を地球規模に拡大する」ような対話に参加する必要がある、ということを意味する。[17]

だがそれは容易に実現できることではない。対話が単にどのような状況でなされてきたかを認識するだけでは十分とは言えず、いわんや「〈政治における邂逅〉（politics of the encounter）それ自体がいかにして把握できるかを、あまりばかげていない仕方で学ばなければ、〔対話の成果を〕期待することなどできはしない」。したがって、「大いなる対話」（great dialogue）を提唱しつつもダンは、コスモポリタニズムやグローバリズム、「文明間対話」といった既存の概念を超えたところにそれを打ち建てようとしているかに見える。おそらくは、現代におけるリベラルの理論の多くがそうであるように、これらの概念も「ユートピアン」に過ぎると彼は考えているのだろう。

しかし懐疑主義をその論理的帰結まで推し進めつつも、あるいはまさにそれゆえに、ダンは彼の「ユートピアンな」論敵たちよりもはるかに野心的であるといえよう。既存の理論の大多数あるいは一切が（ユートピアンで

あろうとなかろうと）十分に有効なものではないとしながら、にもかかわらず彼が強調してやまないのは、ダイナミックかつ徹底的に考え抜かれた世界対話のプロセスを通じて現実的な思考様式を編み出す必要が、いかに猶予を許さぬものかという点である。とはいえ、この主張が、ありがちな見解につきもののオプティミズムと無縁であることは言を俟たない。むしろダンは、我々がこのゴールに辿り着くのをさまざまな障碍がどれほど妨げるかに熱弁をふるっている[18]。だがここで再び、失望は避けられないという認識が、我々の合理的に期待しうるものとそうでないものとを理解する手段としていかに有意義に働くか、ということに留意すべきだろう。

そうとすれば一体、「人間の政治的思考の歴史〔的展開〕を地球規模に拡大する」とは何を意味するのか。そしてまた、これを遂行する価値のある計画とするなら、どのように着手するのが正しいのだろうか。当然ながら、明確で決定的な回答を期待するわけにはいかない。対話が鍵となり核となるということは、とりもなおさず、何らかの結論を表明するのと同じくらい協同の思考プロセスそのものが重視される、ということである[19]。ならばなおさら、いかにしてこの対話の道筋をつけていくべきかが問題となる。はたしてどのような条件が付されるのだろうか。

ダンの近著（特に論文「文明の衝突と新世界無秩序の政治的原因」）からは、人々の集団的行為の原因にまで及ぶ文明の影響力を彼がある程度認めている様子がうかがえる[20]。さまざまな議論を呼んだハンチントンの「文明の衝突」テーゼに、部分的には共感を示しつつ解釈するなかで、ダンは（ハンチントンによれば）文明とは「どのように生きるのが人間にとって有意味か、またその道が他のものより有意味といえるのはなぜか、その答えを形作るさまざまな概念を納めた現代の保管庫であり、歴史的資源である」と説明している[21]。あるいはその他の箇所でも、文明が規範秩序の源泉としてはたらくこともあり、「革命の経験が引き起こした断絶は、およそ現実社会たるものが峻厳な試練に耐え、そして乗り越えていくための耐久力は、ある集団の長い文明的背景という過去から

生まれてきたのであって、未来に関する魅惑的な空想（tabula rasa）からではないということを示すのに役立ったのだ」と述べている。[22]

さて、議論を先に進めるまえに、右の前提が必ずしも自明の理ではないということを確認しておきたい。人によっては、文明という概念はあまりに定義が広く漠然としており、そこから何か有意義な説明を得るのには無理があると異を唱えるだろう。常に変遷の過程にある多様な文明にそれぞれ明確な輪郭線と内容とを与えるのは、いかなる時も困難のつきまとう作業である。あるいはまた、文明論への依存そのものから生じる自己充足的予言が、現実にもたらしうるリスクにも注視すべきかもしれない。私自身、「文明」という語を用いるのにはいささか抵抗があることを認めねばならない。この言葉はどうも、あまりにイデオロギー的色彩が強いように思う。しかし言うまでもなく、ダン自らもこれらの問題点を十全に意識している。そのうえで彼の意図というのはおそらく、出来合いの文明論的フレームワークを採用することではなく、むしろある種の集団的歴史アイデンティティがいかに人々の協同行為に影響を与えるか、しかもそれが合理的に同定可能な利益をしばしば無視するような仕方で行われるという点を考慮することにあるのではないか。この意味において、「文明」（残念ながらほかに適当な語がない）はまさに注意を向けるに値する。

では一体、我々はこの文明という資源をどのように活用すべきだろうか。この課題を達成するための明確な方法論を、ダンはまだ提示していない。だが繰り返しになるが、問題は何らかの具体的な方法を案出することではない。さまざまな文明の地底を掘り返して未知の真理やら解決法やらを発見することでもない。このような秘宝が苔むした地面の下に眠ったまま掘り出されるのを待っていると夢想するのは、度を越したオプティミズムであろう。ダンにとってそれは単なる発掘作業ではなく、コミュニケーションと相互理解を通じた創造のプロセスというべきであり、まさにこの点において彼のプロジェクトは最も野心的な側面を見せるのである。差し迫った地

球規模の危機に対峙するための新しい思想を生み出すには対話が不可欠である――しかし対話なら何でも、というわけにはいかない。おそらくダンは、この対話がたとえどれほど包括的かつ民主的であろうとも、最大限の注意と考慮を注いで慎重に進められるのでなければ、高い確率で失敗に終わると言うだろう。なんとなれば、対話がデモクラシーの流儀で行われるべきかどうかすら確かとはいえない現状なのだ。

しかしながら、ただ一つ確言できることがある。どんな形式を採りどんな課題を扱うことになろうとも、この対話においてデモクラシーの問題は必ず議論されねばならない。なぜならデモクラシーは、人類の歴史において初めて、現代世界における普遍的な「世界標準」、「政治的権威の正当性原理に対して世界的に認められた唯一の名称」となったからである[23]。この現象はきわめて異例であり、他のいかなる語や概念も未だこれほどの地位を獲得したことはないのだ。だが当然、これで万事解決といくはずもない。ポスト冷戦時代においてもなお、『政治思想の未来』に記された次の言葉の響きは少しも弱まらない――「われわれは今日すべて民主主義者であるとしても、その運命は、必ずしも共にするのが心楽しいものとはなっていない。今日の政治においては、民主主義とはわれわれが持ちえないもの、しかも欲することを止めえないものの名称なのである[24]」。

対話というコンテクストのなかでデモクラシーを扱う際、ダンが特に注意を喚起しているのが世界最大の民主主義国家、「対話に新鮮な材料を提供」しうる「宝庫」たるインドである[25]。だが私自身はインドの専門家ではないので、残された紙幅では日本の問題に焦点をあて、ダンと日本人の学者たちとの間でこれまでどのような対話が行われてきたか（そして現在も継続中であるか）を記して本稿の締め括りとしたい。

二　ダンと日本の関係

これより以下の記述は、それぞれ二〇〇七年一一月三日と九日に行われた加藤節および半澤孝麿両氏――いずれもダンの親友である――へのインタビューに多くを拠っている。

前置きとしていくつか伝記的事実を示しておくと、ダンの訪日はこれまで一九八三年、一九九一年、一九九九年、二〇〇五年、そして二〇〇六年の五度に及んでいる。一九八三年の来日時には丸山眞男、福田歓一との出会いもあった。彼らは戦後日本における最も著名な知識人であり、そのデモクラシー観をめぐっては賛否を含む実にさまざまな議論が交わされていた。丸山とはこれが最初で最後の邂逅となったが（一九九六年に死去）、彼の人柄と業績はダンに感銘を与え、そのことを「日本のたどる政治的麻痺への道」という論稿のなかで語っている。これはもともと、二〇〇一年にカリフォルニア大学バークレー校・日本研究センターで開講された丸山レクチャーのためのスピーチとして書かれたものだった[26]。一方、福田（二〇〇七年初めに死去）とはほぼ日本を訪れるたびに顔を合わせ、二人の思想家のあいだには広範な知的交流が結ばれていたといえる。

しかしまずは、そもそも日本の学界とダンとの知的な交友関係がどのようにして始まったのかを振り返ることとしよう。実は三〇年以上も前の一九七〇年にすべての端緒を開いたのは、半澤その人である。当時、東京都立大学で政治思想史の教員を務めていた彼は、一年間の研究休暇をケンブリッジ大学で過ごすことになった。それまでダンの存在を知らなかった半澤であるが、当地のヘファーズ書店でダンの新著『ジョン・ロックの政治思想』にふと目を留めた[27]。そしてこの本から強烈な印象を受けた彼は、ダン本人に直接連絡を取ろうと決意する。こうして実現した幸運な出会いが、その後の長きにわたる知的交流と友情との始まりとなったのである。それに続いて、加藤（ロックの政治思想研究における日本の第一人者）もまた半澤にならい一九七九年の研究休暇でケンブリ

ッジに滞在、同じくダンの学問上の同僚となり親友となった。以来数十年間、半澤と加藤はダンと日本の学界とを結ぶ要の役を果たしてきたのである。

その間には、ダンの著作もいくつか日本語に翻訳された。最初の例は宮島直機のイニシアチブで一九七八年に出版された『近代革命』（邦題『現代革命の系譜』）であるが、不運なことにこの本は十分なインパクトを与えるに至らなかった[28]。加藤と半澤によれば、その原因は主として訳文の出来にあるという。しかし、たとえ翻訳が素晴らしかったとしてもおそらく、大多数が旧式のマルクス主義に凝り固まっていた当時の日本の革命研究者たちに好意的な受容は期待できなかったろう、と半澤は付け加えている。

しかし事態は、一九八三年に出版された『政治思想の未来』の翻訳によって劇的に好転する。聞くところによれば、この著書が広範に読まれたことから、ダンは徐々に日本の政治学研究者から注目を浴びるようになっていったのである。そしてこの傾向は、オックスフォード・パストマスターズ・シリーズの『ジョン・ロック』の翻訳を一九八七年に出版したことで決定的になる[29]。日本語訳を担ったのは加藤であり、彼はこの本により（ダンのものとたぶんに同調する、彼自身のロック研究とあいまって）日本における既存のロック解釈のパラダイムを大きく転換させたのだった[30]。このようにして、現代政治思想およびロックの政治思想、そしてさらには政治テクスト解釈における方法論、といったダンの研究が有する多様な側面が、それぞれに紹介され認知されていったのである[31]。

ダンの度重なる訪日が彼の名をさらに日本の政治学界に親しいものとしたことは疑うべくもなく、日本人研究者たちとの対話はおそらくこれからも継続されていくだろう。成蹊大学は先ごろ「デモクラシーとナショナリズム」と題するプロジェクトを発足し、二〇〇九年にはその総仕上げとして国際シンポジウムを開催する予定である。そしてダンはこのプロジェクトを通じて中心的な役割を果たしていくこととなろう。ついでながら、加藤はダンの近著『人民を自由にする』を大学院セミナーで読むことを提案したそうであり、順調に行けばそこから翻

訳プロジェクトを立ち上げることもありうると語っていた[32]。

ダンと日本人研究者たちとの間でなされた対話の具体的な特徴と内容は、数行に要約できるようなものでは到底ない――というよりそもそも、要約が可能かどうかすら私には疑問である。しかしながら、いくつかの逸話を紹介しつつ、少なくとも試みるだけの努力はしてみようと思う（ここでもやはり私の記述は、半澤および加藤両氏とのインタビューから学んだことに大きく依拠している）。

ダンの日本における第一印象は、驚嘆ともいうべきものだった。西洋とはかくも異なる国が驚くほど成功裏に近代化を果たし、民主主義の体制を導入したという事実に、彼は目を瞠る。だがそれと並んで彼に衝撃を与えたのは、一部の日本人研究者（特に丸山、福田）が到達していた西洋思想に対する理解の深さであった。しかしながら彼らとの議論を進めていくうち、日本の近代化プロセスに彼らが厳しい批判の眼を向け続ける理由に、ダンは気がつき始める。日本は確かに民主主義を政治体制として確立するのに成功したが、それは必ずしも政治的価値としての、あるいは政治文化やエートスとしての民主主義とは結びついていなかったのである。ダンは後にこの現象について、日本の早期の経済的繁栄が「民主主義を媒介とした勝利」（a triumph through democracy）ではあっても「民主主義にとっての勝利」（a triumph for democracy）とは言い切れないものであったと述べている[33]。

福田も丸山も、政治社会の作為性を明確化することでこの問題に立ち向かおうとした。すなわち、国民国家を「イデオロギーのフィクション」とみなすなら、それはつまるところ自律した個人による自発的な同意の産物にほかならない。このような思考スタイルに（しかもそれが、西洋のコンテクストでは所与とされる文化的前提や宗教の遺産を欠きながら、なお道徳的・哲学的議論として形成されたという点に）深く感銘を受けたダンは、この問題を日本だけではなくデモクラシーにもとづくすべての近代国家に関わりうるものとして描き出し、議論を広く展開させようと試みたのだった[34]。

第二の逸話もこれと関連しているのだが、そこで大きな役割を果たすのは、福田・丸山を踏襲しデモクラシーの理論化と同時にジャーナリズムによる現実政治への参画を図る加藤である。前述のとおり加藤はロック研究者であるが、一九八〇年代後半からは現代政治についてもダンと意見交換を行うようになった。彼の主たる関心は、福田や丸山と同じく、どうすれば有意義なかたちで日本の地にデモクラシーを確立することができるか、という点に向けられている。そして、今なお日本は西洋から多くを学びうるという前提のもと、日本の政治状況を批判する際に彼がしばしば援用するのが、西洋の思想家たちの（特にロックの）議論なのである。

だがその一方で、現時点で具体的な成果をあげるためには何か簡潔明快な理論を（必要ならさらなる批判的吟味の余地を残しつつ）提示するのもやむをえないのでは、と時折感じることがあると加藤は告白している。そしてだからこそ、何ものも余さず吟味しようとする、ダンの批判的追究にかける不屈の精神は賞賛に値するのだ、と彼は言う。ダンのアプローチは、多様な時間軸と環境のなかでデモクラシーがどのように機能し、また機能しないのかを理解するうえで欠かせない重要な要素を、次々と明らかにしていく。そしてこの考察は地球上のどの地域にも劣らず、日本にとっても大きな価値を有している。加藤が、一種の知的な労働分業ともいえるダンとの対話を、不可欠かつ未来に向けて継続されねばならない作業だと考える理由がここにある。そしてそれとは別にまた、これほどかけ離れた文化的・文明的背景の学者たちが互いに意志を伝え合い、きわめて深いレベルで政治およびデモクラシーに関わる思想を共有できることの素晴らしさについても加藤は語っていた。

さて、これまでの議論から「大いなる対話」が期待される結果を生むための道筋を正しく、順調に辿っていると結論するのは早計にすぎるかもしれない。だがそうだとしても、次のことは確信を持って言えるだろう。このような対話なしには、我々はみな揃って、底知れない「非理性の狡知」の手で最悪の径路へと引き摺りこまれてしまうほかないのだ、と。

（1）二〇〇七年一二月一三日―一五日に開催。プログラムや報告ペーパーなどについては、左記のホームページを参照。http://www.rchss.sinica.edu.tw/politics2007/

（2）*Western Political Theory in the Face of the Future*, Canto edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p. vii. なお初版（一九七九年）の邦訳は、ジョン・ダン（半澤孝麿（訳））『政治思想の未来』（みすず書房、一九八三年）。

（3）*The Cunning of Unreason* (London: Harper Collins, 2000).

（4）"Tracing the Cunning of Unreason: A Quest for Political Understanding" (reference paper, International Conference in Honor of Professor John Dunn), pp. 11-12.

（5）*The History of Political Theory and Other Essays* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 3.

（6）*The History of Political Theory and Other Essays*, p. 5.

（7）"Rights and Political Conflict," in *Interpreting Political Responsibility* (Cambridge: Polity Press, 1990), pp. 45-60 (p. 50). 件の理論家たちが「現代の政治的感受性へ有効に訴えかけられるのは、それがすでに十分にリベラルな性質を具えている場合である。（しかもそうした場合に限られる）」。だが最も深刻な政治的対立は、「リベラルな価値観の境界線を越えたところ」で生じるのである。

（8）"Taking Unreason's Measure: Facing the Global Challenges of Politics" (discussion paper, International Conference in Honor of Professor John Dunn), p. 12.「また、この時人生で初めて私は、政治の仮借ない破壊力に直面することとなった。ほとんどすべての国民の日常生活を一瞬で奪い取り、当分復興のめどがたたないほど粉々に打ち砕く。それも国を挙げた戦争の作戦によってではなく、（中略）単なる無能、貪欲、そして残酷さのゆえに」。以下も参照。*Western Political Theory in the Face of the Future*, p. 115.

（9）*The History of Political Theory and Other Essays*, p. 3.

（10）*The Cunning of Unreason*, pp. 21-22.「我々は一体どうすれば、過ちを犯していると自ら悟り、より信頼のおける他者の判断を仰ぐ必要を知ることができるのだろうか。政治における重大な問いとは、ジョン・ロックが多くの先人たち、とりわけプラトンにならいつつ詳細に論じたとおりである。『誰が裁定者となるべきか』」。

（11）なお、シンポジウムではダンとロックの類似性を指摘する報告がいくつもあった。

（12）*Western Political Theory in the Face of the Future*, pp. 106-107.

（13）彼はさらにこのようにも述べている。「現時点で私がこの問題に関して力説しておきたい一つの結論は、次のとおりである。すなわち、我々が協同で営む生活の諸条件は自由に合意のうえで決定されるべきだという考えは、もっとも魅力的な説のように聞こえるかもしれないが、実はおよそあてにならない代物である、ということだ。なぜなら人が自由に選択しうるのは、対象を明確に理解している時のみであり、我々の暮らすこの世は、つまり『非理性の狡知』で私が描き出そうとした人間世界は、我々の誰一人として真に理解できないような因果関係が、現実を最も強力に支配しているような世界だからである。だからといって、デモクラシーが誤った選択だというわけではなく、ましてある種の独裁のほうが望ましいということにはならない。ただ、デモクラシーは社会主義と同じく、思想としての魅力が現実の経験として期待しうる実効性なり有益性をはるかに凌駕するということである。貴方がデモクラシーを好むのは（貴方が好むとしてだが）、きわめて正当な理由があってそうしているのだ。だがこの嗜好にとらわれた意見のせいで、デモクラシーが現実にも同じくらい好ましい結果をもたらしてくれると期待するのは、止めたほうがよい」（"Tracing the Cunning of Unreason," p. 18）。

（14）*The Cunning of Unreason*, pp. x-xi.

（15）"Reconceiving the Content and Character of Modern Political Community," in *Interpreting Political Responsibility*, pp. 193-215 (p. 193).

（16）*The History of Political Theory and Other Essays*, p. 3. 次も参照。*The Cunning of Unreason*, p. 11.「なぜヨーロッパの思想家なのか。さて、それは単に昔馴染みだからというわけではなく、政治というのがヨーロッパ的思惟範疇でありそもそもヨーロッパ起源の言葉であるから、そして現代政治のなかでヨーロッパ的思惟範疇が今なお危険なほど特権的な地位を担っているからにほかならない」。

（17）"Taking Unreason's Measure," pp. 18-19.

（18）"Taking Unreason's Measure," p. 19.「歴史あるすべての人間共同体を対象とした具体的な調査と解釈、その記録はこれまでほとんど光を当てられてこなかったが、それらを蒐集しお互いの理解可能な範疇に収めることに全力を尽くすのが喫緊の課題である（……）それが最も重要な点なのだ。そうすることによって我々は共に、そして我々の理解力が許す限りはやく、この共

有空間を分かち合う相手が実際どのような人間なのか、また彼らのほうではこの共同生活におけるチャレンジをどのように見ているのかを学ぶことができるのである。だが、それと平行して空間自体の環境適性の改善を目指して協働する必要もあるため、この課題はますます困難なものとなっていくだろう。しかし同時に、場合によっては第二の課題が第一の課題を部分的に方向づけることもありうる」。

(19) ある種のコミュニケーションを通じて相互理解を探ろうとする発想は『政治思想の未来』にすでに見られる。*Western Political Theory in the Face of the Future*, pp. 108-109. 以下、訳文は半澤孝麿訳『政治思想の未来』一五九―一六一頁。「われわれ自身を、他者と同じ理解の枠の中に入れることは合理性への一条件である。自分の利益に対して他者のそれに対する以上に優先性を与えることを思い止まるのは、道徳における一つの進歩である。われわれが、他者を理解する枠組と同じ枠組に自分たちを含ませることが、まさに、人間の（可能な限度までの）相互理解を可能とする。ヘルダーはこう述べている。「われわれの、われわれ自身に対する感情の深さの度合いが、他者に対するわれわれの共感の度合いを条件づける。なぜならばわれわれが他者に投射できるのは結局われわれ自身だけだからである。」そうした理解を可能とする実践的な技術は、言語を駆使する能力である。この技術こそ、人間的真実の中にあるかもしれない私的性格と、その本質的な因果的被決定性――現状ではわれわれは、その有りようを本当に明晰には知らない――とを共に制限するのである。われわれは原理的に相互を良く理解できるはずであるし、また、共通な人類の構成員たることをより大らかに承認しながら、種全体として原理的に協力し合うことも可能なはずである。それも結局は、われわれが相互にかくも厳密に通信可能であるからにほかならない。だがひるがえって考えれば、言語とはたんに自然的能力であるに過ぎない。それをどのように役に立てるかはわれわれの決定すべき事柄である。相互に対する主張の基礎として、この生物学的運命共同体を実践的に承認するよう選択せよと強いるものは何もない。確かにいえるのは、相互理解への自然的能力は、もしわれわれがそう選択しさえすれば、文化的に涵養し、道徳的に承認するよう努力することができる能力なのだ、ということだけである。

目標はあまり高く置き過ぎないことが肝要である。相互理解は一定の相互尊重の可能性を帰結する。だからといっていかなる尊重の必然性も、完全な尊重の可能性も、帰結するものではない（われわれは同時代のある人々に対しては遺憾に思うし、われわれのうちでも一部の人々は、同時代の相当な部分に対して遺憾に思っている。）われわれが自分に対して帰する十分な理由

を持っていない水準や型の尊重を、他者に対して向けよとみずから強いるのは無益なことである。それでも、つつましい水準の自己理解に立脚した適切な協力への態度――互いの、世にあらぬほどの高貴さをお人好しにも勝手に信じるのではないが、陰鬱な相互疑惑だけは回避する態度――があればそれは、たとえば一見同様の基礎の上にホッブスが主張したものよりは、ずっと楽観的たりうるのではないだろうか」。

(20) "Civilizational Conflict and the Political Sources of the New World Disorder" は、退職記念シンポジウムの参加者に事前に配布されたディスカッション・ペーパーである。なお、同ペーパーは、二〇〇六年七月一一日に九州大学で開催された国際シンポジウム「グローバル化と多文化状況における政治理論」（二一世紀地球市民育成のための政治哲学的基盤形成リサーチコア主催、九州大学政治研究会共催）でも発表された。

(21) "Civilizational Conflict and the Political Sources of the New World Disorder," p. 3.

(22) "Taking Unreason's Measure," p. 12.

(23) *Setting the People Free* (London: Atlantic Books, 2005), p. 15. さらに、次も参照。"Taking Unreason's Measure," p. 16.「しかし、たとえ容易く罵り合いや騙し合いに堕し、人を混乱の渦に陥れるような代物であろうとも、これが今日一つの現実的な対話であることは紛れもない事実なのである。あるいは話し合っているのは聾者ばかりかもしれない、しかも彼らはユルゲン・ハーバーマスが推奨したものとはおよそかけ離れた精神と環境に支配されていることが多い、だがそれでも対話は対話、そのことに間違いはないのだ。デモクラシーは、信奉者たちを導いていくには不十分であるし、どう贔屓目にみても規範的な問いへの答えとしてはあまりに脆弱である。しかしながら、全世界に浸透した政治概念としての力は、それがもたらす権威の明晰さと安定性とによってではなく、今日におけるその固有の非正当化能力によって繰り返し証明されてきたのであった――デモクラシーに対する軽蔑と嫌悪とを公然と表明する人間による服従義務の要求は、その正当性から規範のもてる重みすべてを剝ぎ取られるのである」。

(24) *Western Political Theory in the Face of the Future*, p. 28. 訳文は半澤孝麿訳『政治思想の未来』四六―四七頁。

(25) "Taking Unreason's Measure," p. 17.

(26) "Japan's Road to Political Paralysis: A Democratic Hope Mislaid," in *Two Lectures by John Dunn: the Maruyama Lecture and Seminar*

2001 (Occasional papers, no. 2, Center for Japanese Studies, University of California, Berkeley, 2001), pp. 5-23. 邦訳は、安武真隆訳「日本のたどる政治的麻痺への道――置き去りにされた民主的希望」(『思想』九三八号、二〇〇二年六月号) 四―二六頁。

(27) John Dunn, *The Political Thought of John Locke* (Cambridge: Cambridge University Press, 1969).

(28) John Dunn, *Modern Revolutions* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972). 宮島直機監訳『現代革命の系譜』(中央大学出版部、一九七八年)。

(29) John Dunn, *John Locke* (Oxford: Oxford University Press, 1984). 加藤節訳『ジョン・ロック――信仰・哲学・政治』(岩波書店、一九八七年)。

(30) 加藤の著作については特に以下を参照。加藤節『ジョン・ロックの思想世界――神と人間との間』東京大学出版会、一九八七年。また、彼は最近、ロックの『統治二論』の全訳を発表した。加藤節訳『統治二論』(岩波書店、二〇〇七年)。

(31) 注目すべきことに、「ケンブリッジ・モーメント――美徳、歴史、公共哲学」と題された国際シンポジウムが二〇〇五年一二月に千葉大学で開催され、ダンとポーコックの二人は「ケンブリッジ学派方法論」の主唱者として招かれている。また、短いながら示唆に富んだ半澤の論稿にも触れておくべきだろう。この論文は、ダンの思想のさまざまな側面を連関させていくことで、そのエッセンスの抽出を目指したものである。Takamaro Hanzawa, "The Political Thought of John Dunn and the Cambridge School," *History of European Ideas*, 19-1-3 (1994), pp. 179-183.

(32) Dunn, *Setting the People Free: The Story of Democracy* (London: Grove Atlantic, 2005).

(33) "Japan's Road to Political Paralysis," p. 7. 安武真隆訳「日本のたどる政治的麻痺への道」七―八頁。

(34) 「日本のたどる政治的麻痺への道」の最後の数頁を参照。